

# 特集 敬老の日 9月15日

総理府統計局が先ごろ発表した、昨年十月に実施した国勢調査の1%抽出集計結果によると、わが国の人口構成は、零歳—十四歳の年少者が四分の一を割った反面、六十五歳以上の老年人口が七%を突破するなど、高齢化が進んでいることが明らかにされ、老人問題は、今後の大きな社会問題として、各方面で論議されています。ところで、九月十五日は「敬老の日」祝日というところ、とかくレジャーや骨休めだけの日になりがちですが、この日を機会に、だれもが到達する「老人」としての生活について、あなたもぜひ考えてみてください。

## 進む老齢化

### 13人に1人が老人

市の総人口が、昭和三十年の国勢調査以来、減少傾向にある反面、六十五歳以上の老人の数は年ごとに増加しています。

その結果、総人口に占める六十五歳以上の老年人口は、昭和三十年の国勢調査では四・二%であったものが、四十年の同調査では五・七%となり、本年四月一日現在の福祉事務所調べでは、実数で二、一三三人、総人口との割合は七・六%にもなっています。

### 清掃奉仕や運動会 高まる

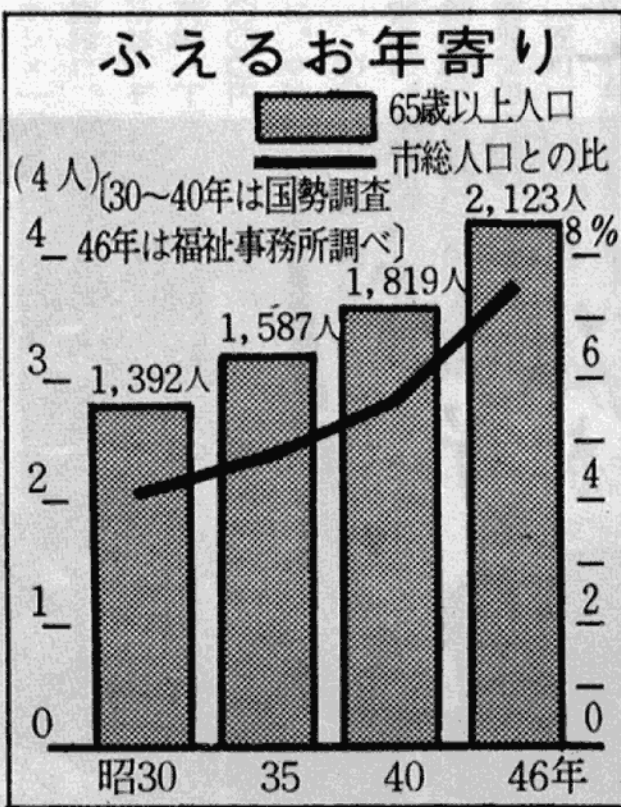
#### 老人クラブ活動

市内の老人クラブは、現在三十四団体、約一、五〇〇人のお年寄りが加入していますが、その活動も年ごとに活発になっており、子供たちとの運動会(清滝三丁目)や、若い者との触れ

合ひも兼ねて、青年団といっしょに清掃奉仕(小来川)を行なうなどのほか、病気の老人への友愛訪問、映画会の開催など、積極的な活動を行なっています。

近年の老人クラブ活動の特色は、これまで、お年寄りが集まって、お互いに慰め合うといった、いわゆる「同病相哀れむ」的な考え方から、クラブ活動を通じて、老人は老人なりの力で社会に奉仕し、年寄りの毅に閉じ込まずに、若い人たちの中にも、積極的に入っていくというように変わって来たことがあげられます。

このことは、老人の保護中心だった、これまでの老人福祉対策から、老人を、単に社会的に弱い者としてではなく、「尊敬すべき人」として、生きがいのある余生を与えてあげる、といった方向へ、これからの老人福祉対策が進まなくてはならないことを物語っています。



## 寝たきり老人見舞金

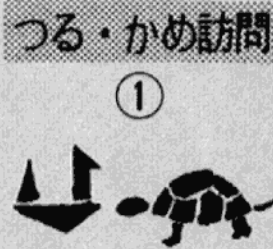
### 今月から初の支給へ

市内に住んでいる八十歳以上のお年寄りで、現在寝たきりのかたに、今年度から見舞金(年額五、〇〇〇円)をお贈りする

ことになったことは、四月号でもお知らせしましたが、その第

一回が、今月、三十七人のお年寄りに贈られます。

この見舞金制度は、長い間市のために寄与されたことに対する慰労の一端ということで、一般の年金のように所得の制限な



●手縫いのぞうきん 五〇枚を寄付した

金田カクさん(89歳)

明治十五年生まれ、満八九歳の金田カクさん(中宮祠)が、日光保育所にぞうきん五〇枚を寄付しました。

大正五年に福島県会津から中宮祠に移り、現在まご十八ひまご十一人というカクさんは、お話しぶりもお元気そう



どはなく、県内では、本市が初めてこの制度です。

### 敬老年金も今月が支給月

寝たきり老人の見舞金と同じく、市の単独事業として四十三年度から行なっている「敬老年金」は、昨年対象年齢を二歳引き下げ、七十八歳以上のお年寄りに、年額六、〇〇〇円を年二回に分けてお贈りしていますが、今月はその支給月に当たります(次回は来年三月)該当されるかたには、近く福祉事務所から通知を差し上げますが、該当されるかたで、まだ申請手続きをされていないかたは、お近くの民生委員さんを通じてか、直接福祉事務所へ、至急申し出て下さい。